

日本体育学会第 68 回大会
体育社会学専門領域キーノートレクチャー

地域スポーツのこれまで、そして、これから
中島信博（東北大学名誉教授）

司会：石坂友司（奈良女子大学）

日時：2017 年 9 月 9 日（土）13:00～14:00

会場：静岡大学共通教育 A301

主催：日本体育学会体育社会学専門領域

【石坂】 こんにちは。今年度より研究委員をしております、奈良女子大学の石坂と申します。どうぞよろしくお願いたします。このキーノートレクチャー、それから次に続きますシンポジウムの簡単な趣旨説明をさせていただきます。2020 年東京オリンピック・パラリンピックの招致が決まり、開催まで 3 年を切りました。大会開催に向けては、体育社会学専門領域でも、社会学的な観点から、さまざまな地殻変動が起きるのではないかとという前提で議論を続けてきております。今回はスポーツにおける大衆化の側面が、大会後を見据えてどのように議論されているのか、あるいはされていないのかということ一度考えておきたいということで、このセッションを企画いたしました。

周知の通り 1964 年の東京オリンピックは、エリートスポーツ、すなわちメダルを取ることにもまず主眼が置かれてスタートしたわけですが、その後に大衆化が起こり、地域に開かれるような形でスポーツが広がっていったという側面がございます。オリンピック後に始まったコミュニティ・スポーツであるとか、地域スポーツの流れといったものが、現代とどのようにつながっているのか、あるいはつながっていないのかということを検討しながら、これから迎える 2020 年大会に向けてどのようなことをわれわれは考えておくべきなのか、という視点で今日はお話をいただくということになります。

演者の先生を紹介いたします。中島信博先生です。私から特に紹介をするまでもないかもしれませんが、中島先生は現在、東北大学の名誉教授でいらっしゃいまして、東北大学大学院教育学研究科で長年にわたって教鞭を執られました。先ほどお聞きしましたら仙台には 39 年おられるということでした。専門はスポーツ社会学で、地域やコミュニティ・スポーツなどを長年研究されてきました。著書には『農民生活における個と集団』（共著、御茶の水書房、1993 年）、論文には「『地域スポーツ』の誕生」（『月刊自治フォーラム』）、「『芝生』によるスキー民宿再生の試み」（『社会学年報』）など、地域、地域スポーツの視点から論考を多数書かれております。日本体育協会・日本オリンピック委員会創立 100 周年記念式典が

2011年に行われたわけですが、それに先立つ「スポーツによる『公正で福祉豊かな地域生活』の創造」という記念シンポジウムの、シンポジストも担当されております。これまで地域スポーツの政策的な展開に対しては、フィールドを中心に足場を固める議論を展開されてきた先生でもありまして、本専門領域では長年にわたり活躍をされてきました。今日は1時間程度ですがお話をいただきまして、後ほどシンポジウムにもコメンテーターとして加わっていただきます。それではどうぞよろしく願いいたします。

【中島】 ただいま、ご紹介いただきました中島です。石坂さんは大変持ち上げてくれましたけれども、私はそれほどたくさんこの分野で書いているわけでもありませんので、今日は責を果たせるかどうかあまり自信はないんです。数年前に既に引退をしまして、現職は退いております。そのままフェードアウトするんじゃないかなと思っていたんですが、ちゃんとカミングアウトしたうえでフェードアウトしろ、ということかなと思ひまして、今回あえて引き受けさせていただきました。お手元の資料が大変小さな印刷で見にくいかと思いますが、時々ご覧いただきながら、お聞きいただきたいなと思います。



中島信博氏

大変大きなテーマをあえて掲げてみました。『地域スポーツのこれまで、そして、これから』と、マクロな歴史的な視点からもう一度振り返ってみて、一体われわれは今、どういうところに立っているのか、もう一度考えてみたいと思います。そして総合型というものの歴史的な性格についても、私なりにその特徴を指摘し、最後にこれからのポスト総合型を見通せるような視点が共有できれば、という気持ちで参りました。

大変大きなテーマをあえて掲げてみました。『地域スポーツのこれまで、そして、これから』と、マクロな歴史的な視点からもう一度振り返ってみて、一体われわれは今、どういうところに立っているのか、もう一度考えてみたいと思います。そして総合型というものの歴史的な性格についても、私なりにその特徴を指摘し、最後にこれからのポスト総合型を見通せるような視点が共有できれば、という気持ちで参りました。

2の日本近代化に関連する部分は、私が学生相手に講義してきました図式です。スポーツにあまりなじみのない学生たちに、日本の近代化の中でスポーツに見いだせる問題群として挙げていたものです。それから、総合型の性格のところは、この政策が持っている特徴というものを、特に地域で招かれた際に、述べていたことをこの場でも繰り返させていただきたいなというふうなことを思っております。そんなあらすじでお話させていただきたいと思います。

私、仙台に1974年からおりますので、その間に2回大きな震災がありました。いずれも私自身は被害をそれほど受けていませんけれども、東北の地にあつて、それから災害という視点も若干入れ込みながら話せればなと思います。余談ですけども、仙台というのは東京から適当に距離が離れていまして、私はこの距離感が大変気に入ってます。中央に近くない、けどそれほど遠くもないという、しかも東北をある程度見渡せるような位置であるわけです。そういう意味から、私は仙台というちょっと離れた場所で、しかも東北の農村ないし

は都市を見ている状況の中で、私の目に写ったことを話してみたいと思っております。

おこがましいんですけども、ここで自己紹介を兼ねて、私のフィールド体験についても触れておきたいと思います。いろんなところを見てきましたけれども、実は私のフィールドという意味でのスタートは山形の庄内の農村です。そこで農家に上がり込んでインタビューを毎年繰り返してきていたということが自分の原点のようなところになっております。要はベースになっているのが農村的なところなのですが、わざわざこういうことを言いますのは、都市の、例えば町内会なりの調査と違っていたということです。農村というのは生産と生活を一体となっていてやっている家から成り立っています。地域を見るときに、生活の側面だけじゃなくて、どうやって飯を食ってるんだろうかという、その側面もどうも気にかかるという、そういうところからスタートしているということを申し上げたいなと思います。

それから、今回は触れませんが、実は奥羽山脈の山の奥、安比というところですけども、そこで、スキー場開発の事例研究にも手を染めました。山形の庄内で、平場の米を作るところとはまったく違う山村の、そういうところも見てきたつもりです。

それから、その下になりますが、West Bromwich Albion という、イングランドのフットボールクラブにも少し滞在していたことがあります。今日の話では後半部分になりますけれども、私にとりましてJリーグのインパクトは大変大きいものがありました。地元で言いますとベガルタ仙台ですけども、地域クラブという視点から、都市部のスポーツ、さらにはスポーツ少年団というものを詳しく見るという経緯もありました。それから最近では、小さな小学校区くらいで大変面白い試みが今なされているのを、仙台市近郊で見ているものですので、小さなコミュニティ、小さな地域というふうな概念で私がイメージしていることを申し上げたいなと思います。

それから最近のことでいいますと、やはり 3.11 の東日本の震災の後、実は私、地元にながら被災地をなかなか訪れることができませんでした。個人的な性格の問題でしょうか、最近になってラグビー関係者が私を誘ってくれまして、釜石市へ 2～3 年前から行き始めました。そのことを冒頭申し上げたいと思います。次のスライドですけども、2019 年、東京オリンピックの前年に、ラグビーの世界カップが行われるわけです。現在のところスタジアムがない唯一の開催都市として釜石市というのが挙げられております。復興ということに世界が共鳴して、あえて小さな町でやるというふうな決定を下したんだろうと思います。そこで一体何が起こるんだろう、ということをワールドカップが終わった後もできればフォローするような形で、メガイベントの及ぼす影響をフォローしてみたいなというふうに今思っているところです。

実は最近、大変重要な問題じゃないかなと思っているのが、虎舞という伝統行事です。その上にお盆野球というふうに書いてあるんですが、いずれも釜石市の鶴住居地区で私が実際に見たことです。鶴住居といいますのは、実は釜石市で最も犠牲者が多かった地区ですけども、そこにワールドカップのスタジアムが作られようとしているわけです。

私が 2～3 年前から行き始めましたときに、実は印象的だったのが虎舞というものでした。

これは、いわゆる民俗芸能ですが、各集落でこうした伝統芸能、あるいは、神事が行われていて、実は被災後の非常に早い段階から、これをもう一回やろうよという動きがあったということです。つまり地域の記憶を手がかりに、人々がもう一度寄り集まろうじゃないかということです。現に避難生活をし、あちこちの町に散り散りばらばらになっている人たちが、この行事には一時的に帰ってくるという光景を目にしまして、私は、この神事の重さというものを感じたんです。

それから、これは今年8月のお盆の話、ついこの前の話なんです。これも集落単位でチームを作りまして、実は戦後すぐから、この野球大会をやっていたんですね。それで、3.11で中断していたんですが、もう一度やろうよという話になって、今年復活しました。このように、虎舞、お盆野球、そしてワールドカップというふうに、並べて考え始めたところです。なぜこんなことを申し上げるかという、実はわれわれが地域スポーツというようなことでイメージしているイベント、あるいは社会事象ですけども、地域の側から見るとその深さっていうんでしょうかね、自分たちに対する距離感あるいは根の深さのようなものがあるのではないかというのが気にかかります。

この野球大会ですけれども、単なる野球大会ではなくて、ここの若者たちはその多くが普段は地元にはいません。お祭りとかお盆のときには、こうした行事があるからこそ帰ってくるというような、重いものであるということ、幾人かの若者が語ってくれました。地域スポーツもそうあってほしいというふうに願ってるところがあります。地域スポーツ、地域行事といった場合に、それは、重層的な構造をなしているんじゃないかと、そういうふうなことを感じるわけです。

もう一つ余談で恐縮ですが、イングランドのクラブを訪問していて耳にした一種の都市伝説のような話を紹介したいと思います。ある女性のサポーターなんです、「私が死んだら、墓所に向かう車をスタジアムで1回止めてほしい」と、そう遺言して死んだ人がいるっていうんですね。住民にとって、地域のスポーツというのは、そういう大変深いものなんだということを改めてそのとき認識したのです。釜石で虎舞を見ましたときに、似たような感慨にうたれたんです。

次のスライドでは、日本の近代化におけるスポーツ的なものを例示しようと試みました。私なりに地域を見ておまして、「体育・スポーツ」という概念によって、なにを扱うのかという問題です。私の場合は、実はかなり広範囲に問題群をイメージしていることとなります。スポーツ的なものと呼んで引っ掛かってくるものを、柔軟に挙げてみたいと考えて講義でしゃべっておりました。

明治維新以来、東京オリンピック・パラリンピック 2020 で150年ということになります。実はこの150年の歴史を、50年ごとに区切るという時代区分は、守能信次氏が採っておられた方法です。1980年代の論文に示唆されたのですが、私も50年ごとに日本社会を区切ってみたらどういうふうに見えてくるんだろうということを、いまだにやっているところです。

繰り返しますが、奇しくも 2020 年が維新以来 150 年ということになります。第 1 期・2 期・3 期・4 期というふうに分けたのですが、第 1 期というのが、維新时期から第 1 次世界大戦までで、総力戦体制といわれたりする歴史的な段階に入ったというふうに捉えていいと思うんです。それから第 2 期というのはその後の、高度経済成長期を経て、1970 年代オイルショックぐらいまでの時期。それから第 3 期が、1970 年代以降から今日までです。われわれが今いる時点というのは、第 3 期の終わりぐらいにいるんじゃないかというふうに私には見えます。現在起こってるさまざまな社会現象は、第 4 期にむけての「移行期的混乱」なのかなというふうに見えたりもします。どの論者も次の段階を一生懸命イメージしようとしている、そういうふうに見えるところです。

もう少し、あえて単純化して言いますと、第 1 期というのは国家が、第 2 期に比べればそれほど介入していない、というふうに私には見えています。第 2 期は、戦前と戦後にまたがっています。しかし大変興味深いことには国家が介入したという意味では戦前も戦後も、私は共通にくくれる面があるように思えてならないんです。

ここでの課題である地域スポーツの問題は、主要にはここでいう第 3 期に浮上してきたのだと思いますし、われわれが現在、体験し、直面しているということなろうかと思います。第 2 期が、国家がかなり介入した時期だとすれば、第 3 期はどう表現すればいいか問題ですけども、国家が後退していつているといえなくもありませんし、後退しているように見えながらコントロールを強めているのかもしれない。いずれにせよ、第 2 期とはやはり相当違うのではないかと、いうふうな見方をしております。その意味からすると第 4 期はどうなるのだろうかということですね。

まず第 1 期ですが、私は主に 4 つぐらいの問題群を挙げたいと思います。一つは校友会です。日本のスポーツの歴史を考える場合、中等高等教育機関が校友会組織を通じて外来文化であるスポーツを非常に熱心に取り込んだ。裏返しますと、スポーツは当初、庶民とあまり縁のないものだったと思うんです。このことが実は敗戦後の日本で部活動へとつながっていく伏線のように私には思えてならないんです。この間にはいろいろな経緯がありますが、アメリカ軍の日本民主化政策というのも強く絡んでいると思いますが、部活動へつながっていく一つのルートではないのかなと思います。

それから第 2 は、きょうのテーマとはあまり関係ないかもしれませんが、第 1 期日本の近代化のプロセスでよくいわれることですが、日本人の身体というものをいかに作り変えるかが大きな課題でした。その一環として義務教育の中に体操というものを取り込んで制度化したということなんですね。このことは、今日は触れません。

それから第 3 点として、運動会というものがこれは地域に非常に関連したこととして早くから出てくるというふうに思います。それまで地域あるいは、特に村なんかで行われていた、さまざまな伝統的な生活習慣や行事と学校とが接合されるプロセスであったんだろうというふうに思います。あえて私が繰り返すことはないかもしれませんが。そういう意味では一種の文化の習合が、ここで行われたんだろうというふうにもとれるわけです。

それから第4点として、体育協会の創設や国際競技への参加という問題です。日本が国際社会へ乗り出していく、そのときに日本体育協会というのが結成され、オリンピックに参加していく。しかし、実はこの段階では、国家があまり介入しなかったんじゃないかというふうにも受け取れるわけです。最初は財閥の金で選手を送り出していたわけです。いわゆる財源の問題ですが、国家が金銭面でも介入する、あるいはどの程度介入するかという問題が、既にこの明治の末期ぐらいから現れてくるということになります。

第2期ということになりますが、1920年あるいは30年頃の歴史研究を見ますと、現代の政策に直接的につながるような問題が出てきます。例えば野球ですけども、メディアが関係する形で日本社会に大変大きな影響を及ぼした。特にこれを考える場合に、この時期に日本社会に形成されつつあった中間層の存在を、私はいつも強調しているところです。

それから、第2点として東京オリンピックです。戦前期の幻の大会もありましたし、64年もありました。それから、今回もう一度開こうとしているということになるんですけども、国際社会の中で、あるいは成長拡大路線の中で、こういうビッグイベントが位置付けられていった。

それから3番目としまして青年団、神宮大会の問題です。農村研究に関連しても、大変興味深いテーマでして、青年会、青年団というものが国家によって再編されていくプロセスが、この時期であったというふうにも捉えられます。そういう文脈から神宮大会、あるいは現在の国民大会につながるような動きというものも考えられるわけです。

第4に、身体に対する国家のまなざしが強まったのはこの時期であろうと思います。それから、企業を舞台としたスポーツ、これが前面にせり出してくるのもこの第2期であります。この側面からも地域との関連で、大変興味深い問題が含まれている。

それから最後に部活動、そしてスポ少の問題です。特に私はJリーグがスタートする時点で、地域に一体何があるのだろうかということをもう一度見渡してみました。そのときに、最も目についたのはスポーツ少年団でした。地域の人が自分たちでやっているのって何なんだろうっていうことを改めて仙台で見渡してみました、それ以降スポーツ少年団というものに興味を持ちました。そのうえで、部活動とどういう関係にあるのか。さらに地域クラブというものとどういう関係になるのか。子どもの発達、成長あるいは選手養成ということも関係するかもしれませんが、興味深いテーマだなと思ってみております。

以上のような、実は近代化150年の歴史の中でわれわれが地域スポーツということをもう一回構想しようというときに、地域というものの足元、自分たちの足元に、この150年の間に一体何が生まれ、あるいは消えていって、何が残っているのか。そういう観点が非常に重要ではないか、そう思ってあえて手を広げて皆さんの前でしゃべらせていただきました。

それで、低成長期に入る1970年代以降ということになりますが、社会体育の議論がせり出し、大衆化論が盛んになるのもこの時期です。ちょうど私が大学院で勉強し始めました頃が、このレジャー論・余暇論、あるいは遊び論・プレイ論というようなものがアカデミズムの世界で真正面から論じ始められた頃でした。

それから、コミュニティ・スポーツですね、これも 70 年代からということになります。それから後に、さまざまな問題設定がなされましたけれども、生涯スポーツとかそしてクラブ論から総合型へとつながっていったということになります。特に思い出されますのは、70 年代の初期には、ゴールドプランとかの影響もあって、日本にも一種、社会福祉的な発想で、一般市民向けのスポーツということを手掛け始めたら、実は低成長期の時代がやってきた。それで日本独特の展開をしていくということになったのだらうと思います。そして最後に総合型へ、という歴史と私は捉えているところです。

総合型の性格についてですが、これは後のシンポジウムで、もっと具体的に実態を踏まえて議論がされると思います。ここで指摘しておきたいのは、Jリーグというのが大変大きな意義をもっているのではないかという点です。私にとっても大変関心をかきたてられた現象でした。仙台では市民署名運動まで起こったのです。そして、地域密着という言葉が躍っているというような状況は一体何なんだろうということで、仙台での研究会に交ぜてもらったという経緯があります。

川淵三郎さんたちが使用されていた「地域密着」というのは、歴史的に考えてどういうことなのだろう、ということです。既に言い古されたことかもしれませんが、学校あるいは企業を中心に展開してきた日本のスポーツが、第 3 期の 1990 年頃にパラダイム転換を経験したということだと思います。川淵さんたちの先見の明だろうというふうに思うんですけども、時代の一種の地殻変動を感知する能力、そしてそれを形にしてみせる能力という点で、大変優れていたんだらうと思います。

ただし、私自身はやや留保付きで見ているところがあります。それまで企業がスポンサーであったのを、地域というものへ転換させた。それは大変大きいことですが、果たしてそれによって何が起こったか。Jリーグチームを見ておりましたが、その他いろんな動きを見ておりましたが、やはり一種の興行ないし経営からの議論がほとんどのような現状に見えます。お客さんを集めて経営が成り立てばいい、プロ化すればいいという、そういう興行の側面が大変前面に出ていて、地域にとってこうしたクラブを持つ、あるいはプロフェッショナルなクラブを持つということがいかなる意味を持つのか。あるいは住民自体がそういう観点から自分たちの地域を見直し、そうしたクラブの設立導入を考えるという、そういう議論が十分なされているかどうか、大変心もとないのではないかというふうに見ている面があります。

3.11 の時に福島原発の問題がありまして、東京電力が持っていた女子のマリーゼというチームをベガルタ仙台が引き取りました。以来、ベガルタ仙台レディースというチームが仙台にはあります。このベガルタ仙台レディースとして東京電力のチームを引き取るということについて、これはどう考えればいいのかというのが、私は渦中にいてよく分かりませんでした。いいことだろうというふうには思ったのです。しかし分かりませんという意味はですね、どう語っていいかが分からなかったんですね。あるいはもう少し言えば、物語というものが私の頭の中にうまく描けなかった、ということになります。直観的には、なくしては

いけない、女子選手もかわいそうだということはよく分かるのですが、地域にとってこれは一体どういう意味があるのかというのは、いまだに実は考えているところです。

それから70年代以降、第3期からの地域スポーツ論が、今後第4期に向けてどうなるかという問題です。きょうのこの会の核心部分かもしれませんが、一つはコミュニティ・スポーツという70年代初期の議論についてです。コミュニティという言葉自体、当時は新しく、政府も含めてそれまでにないようなあり様を地域に求めたのだらうというふうに思います。論者によっては、町内会を再活性化するための政策だったんだらうみたいな、言い方もされたりします。地域のあり様を、いわば再編成する70年代初期の動きというのが、ここに表れていたんだらうと思います。しかし、結局は町内会活性化論へと収斂していったととらえられます。いい悪いではなくて、いろいろな掛け声はあったけれども伝統的な地域組織である町内会・自治会というものが、結局コミュニティ・スポーツ論の時代の担い手であったということです。このことは現在でも実は、体育協会なり地域のスポーツに関係しても、町内会の果たしている役割は小さからぬものがあるというふうに私は思います。繰り返しますが、70年代のコミュニティ・スポーツ論というものの性格というのは、包括型といわれ、アソシエーションに対するコミュニティと呼ばれている、町内会論・自治会論へと収斂して行って、現在でも続いているのではないかというのが私が思っていることです。歴史的にそういう経緯であったことを踏まえるべきだらうということです。

次のNPOが登場してくる段階になって、あるいはJリーグがスタートして総合型というものが政策の中身として設定されてくるということになります。私からみて総合型というのは、そういう歴史的ないくつかのベクトルの交差点に成立したものだらうというふうに思います。一つは阪神淡路大震災以降のボランティア・NPOという、日本社会の特に公共性論を論じる場合に大変大きなテーマとなって、全面的にせり出してきたNPO論・NGO論、市民的公共性論ですね。そういう地域の動きがあったわけですが、他方で、実はお金の問題があったのだらうとひそかに疑っているところです。算術から仁術へというふうに書きましたが、やはり政府としても財源問題、算術の問題は大変重要な問題であります。

ざっくりとっておきますけども、80年代後半の国際競技力の低下問題に対し、スポーツへの予算をどうするかということになった。基金を作ろうとしたけれども十分なものが設定できないでいたとき、タイミングよくJリーグがスタートするということになって、サッカーくじのアイデアが取り込まれてスポーツ振興くじへとつながっていったのではないか。大変大ざっぱな言い方ですけども、以上のような経緯と、総合型の誕生というものが裏腹な関係になっている。歴史的なタイミングからみて、そうなのではないかと私は見ているところです。従って総合型にはそれなりの歴史的な性格というものが付与されているのではないかということです。

もう一度繰り返しますが、テーマ型のアソシエーションという性格を現在のNPO論が確かに強く持っていると思います。かつての町内会より、むしろそちらに期待するようになってきている。それからお金の問題としては、国庫から回すというよりは、会費制を基本に、

籤のお金で工面するという、このやり方を取ったということですね。これはやっぱり大変大きな影を、総合型の性格に落としているというふうに私は思います。

それから、もう時間がなくなってきました、クラブ論・経営論、下の方ですけども地域論・生活論ということですね。政策を実行するわけですから、致し方ないとは思いますが、私いまだによく分からないのは、総合型というのは一体何なのだろうということなんです。定義づけが私には曖昧であるように思えます。多種目、多世代という言い方はされますけども、むしろ政府のお墨付きという意味合いが強く、そしてトトのお金をもらっているのが総合型ではないのかと、そういうふうにさえ見えます。それから、ドイツモデルというのは大変気にかかるところでして、サッカー関係者もドイツをモデルにしているところが大きいわけですけども。この総合型のイメージを形成する場合においても、実はドイツの影というのも私は感じております。この問題はですね、実は農村なんかでおそらくクラブマネージャーなんかが一番苦労される場所だと思いますが、ヨーロッパでこういうクラブありますといくら言っても、おそらく住民に響かないのではないかと、おそれているところです。私が岩手県なんかでインタビューしても現にそういうことを耳にしました。

それから最後に、受益者負担の問題ですね。予算の問題、これは新自由主義と関係するかもしれませんが、基本的に受益者負担論というのが前面に出てきてるということになります。

最後に、これまでの総合型を巡る議論では、国家政策としての地域スポーツ論・地域スポーツ政策・総合型の政策というのが引き合いに出されてきて、それに対して論じるという議論が大変に多いと思います。地域サイドから問い直すと言いますか、現行の国家政策というものを、地域からもう一度相対化する、そういう面白い研究フィールドではないのかと思うのです。単なる国家政策の受け皿として、小学校区なり中学校区があるのではなくて、それをもう一度問い直す、あるいは作り変える、そういう場所として、生活空間として地域があるというふうにとらえ直す必要がある。既にいわれていることかもしれませんが、この意味はいよいよ強まってくるというふうに思います。

たとえば、指定管理についてです。大変残念なことに、この指定管理の発想はですね、コスト論あるいは効率化論へ流れていくことが大変に多いですね。それよりは、住民がこの指定管理を通じてより参加の度合いを強める、つまり地域の自分たちの身近な施設に対して自分たちが関わっていく、管理をする。そういう発想へとつながるような指定管理論をやるべきだと私は思うのですが、残念ながらそうはなっていないのが現状です。これスポーツだけではありませんけども、さまざまな分野でということなんです。

最後ですけども、ポスト総合型に向けて結論的に申し上げたいのは、小さな地域で、生活課題に応じて多様なありかたを探ることだと考えます。

さらに、明治以来、あの手この手で日本は近代化をスポーツの分野でもやってきたと思います。そのプロセスで地域に創られ、そして残っている遺産をいかにつなぐかだろうと思います。これは地域ごとに相当違うので一概には言えないですね。ここに設計主義とか書きま

したが、いわゆるエンジニアリング的に設計図を一律に渡してですね、こういう感じで再編成をやりましょう、とはいかないはずで。地域それぞれが個性的な歴史を持っているというふうに思います。ですので、地域それぞれで、ということにならざるを得ないと私は思います。

それからもう一つ、実は最近老人福祉のことである研究会に出ることがありまして、地域で一体誰が老人の世話をしてきたんだろうという問題を考える機会がありました。政府は今、大変慌てているように見えます。小地域で元気な老人を、特にボランタリー的に巻き込んで、今から組織作りをしようというふうには私には見えます。これに比べれば私どものスポーツの分野というのは、実はそれなりにやってきた蓄積があるんじゃないかと見ています。十分であるかどうかは別にしまして、たとえば、スポーツ少年団というのは、地域ではそれなりの歴史を持っている。これに限らず、実はいろいろな試みをこれまでもやってきている。老人の介護の問題は見ていて本当に大変ですね。なぜなら、社会福祉法人あたりが一手に引き受けてやっていたから。いわゆる NPO 的なものがあまり育っていない、と私には見えるんですね。で、非常に慌てているというふうに見えます。素人なのに言い過ぎかもしれませんが、スポーツの場合はもう一回自分たちの足元を見渡してみれば、結構使えるのがあるのではないか、ということをお願いしたいなと思います。

それから、寄り添うということを書きました。震災以降、特にこれは感じていることで、なかなか現地にいきませんでしたけれども、結局、寄り添うという姿勢が一番重要ではないかということなんですね。特に、困りごとというふうに書きましたが、今、格差の問題とかさまざま議論されておりますけれども、いわゆる困っている人を視野に入れたような寄り添い方、あるいはつながり方というのが今後求められるんじゃないか、という意味なんです。私が仙台市の南部で見ておりますところでは、あらゆる生活領域にわたって、小学校区単位ぐらいでさまざまな組織がネットワークをつくり、自分たち住民がそのネットワークを動かして、場合によっては行政の専門家を巻き込んでやろうとしている小地域があります。この場合には、あえて繰り返しますが、町内会か NPO かではないのですね。いずれも、大変重要な役割をその場合果たしています。ちょっと切り込んで言えば、おそらく NPO がやろうとしていることを地域につなぐ、オーソライズするような役割を、この町内会がいまだに果たせると私は思っています。NPO だけがいくらがんばっても、かえって地域から浮き上がるということが起こり得るというように思いますが、町内会もそれらの中に巻き込むことで、新たな動きというものが作り出せるんじゃないかというふうに思います。言いたいことは、スポーツだけにはとどまらない、おそらく隣接領域あるいは地域全体の困りごとにも及ぶのだらうと思います。

これは私の失敗談なんですけど、ベガルタ仙台レディースの設立で、女性のトップアスリートたちがやって来ました。彼女たちのトップレベルのプレーにお金を払う、それだけでいいのかという疑問を私は持ちました。女性が地域で暮らしながら、トップアスリートへと育ち、引退後も家族生活を送りながらスポーツに関わる。そんな姿をなんとか見せられないの

かなという思いです。地域クラブが、女性の人生や暮らしに関心を持っている、志を持っているということを、社会に示すことができないものか。つまり先ほど申し上げましたけども、単なる興行としてトップアスリートのいいプレイを見せるだけじゃなくて、自分たちクラブはこの地域でこういうことをやろうとしてるんだということを地域にアピールするメッセージが送れないのかと、というようなことを思うわけです。ちょっとこれは、夢物語かもしれませんが、実際なかなか通じませんでした。私もレディースの会合でしゃべってみたいんですけども、なかなかそう簡単にはいかないということも実感しているところです。

最後に、正四面体のような図を参照してください。日本の長い歴史を振り返ってみますと、ここで言うところの官が、いまだにですけども非常に強い力を持っていて、国家が主導するイメージが強いのです。総合型もその意味合いが強いのと思いますが、それに対して民というものの力、それらをつなぐ、協のつなぎ役の役割ですよ。そういうものが地域にユニークに作られていかないものかなというふうにも思ったりしております。大変抽象的な話になったかもしれませんが、私が40年ぐらい見てきた中で、ポイントはこんなところかなと思うことを申し上げさせていただきました。どうもありがとうございました。

【石坂】 短い時間でしたが結論までありがとうございました。この後のシンポジウムにつながる視点ではありますけども、現在地域スポーツの代表と言われている総合型地域スポーツクラブが、コミュニティ・スポーツからスタートしつつも、何か性格を変えているとする側面が重要に感じました。中島先生のお言葉ですと、国家的なものを相対化するようなものとしての小集団、そのようなかたちで総合型が立ち上げられてきているのではないかということです。そしてそのことについて考えることが必要なのではないかということでした。最後には、地域の中にあるさまざまな資源をどのようにブリコラージュして、つなげていくのかといった観点をご提示いただいたのかなと思います。この後のシンポジウムでも、その辺を議論のスタートにさせていただければと思います。せっかくですので、コメントやご質問がありましたら一点ぐらいお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

【黒須】 順天堂大学の黒須です。中島先生とは東北つながりといいますか、私も福島大学に26年間勤務しておりましたので、仙台と福島で、中島先生には本当にいろいろと総合型クラブも含めて教えていただきました。

先生に作成いただいた資料の中でいくつか確認させてください。私は総合型クラブというものが、市民自らが総合型クラブとはなんぞやと、いうことを議論して設立の手法を見つけてトライアンドエラーを繰り返しながら、その地域にあったスポーツ環境を整えていく、市民的公共圏に他ならないという考え方をもっています。先生がこの資料の中に書かれている、例えば、ポスト総合型のところの地域自治型とか自治的コミュニティというものの意味するところ、総合型の性格について、クラブ論・経営論 VS 地域論・生活論・社会的意味と書かれた内容について、そして最後の三角すいのところで、官が公の全てを担う時代はも

はや終わって、民も官と共に公共を担うというようなことで、協という言葉を中心に用いられたことについて、先生がここに書かれている地域自治型とか、ブリコラージュも含めて先生のお考えと言葉の意味も教えていただければと思います。

【中島】 大変難しい質問をいただきました。自治的コミュニティとか地域自治型というのは、段階論的に見ているところもあるんです。実は、現在訪れています地域の素朴な印象が入りますけれども、問題から入っているという気がしてしょうがないんですね。設計図があってというのではなくて、例えば、地域に困ってる老人がいて、その問題をなんとかしようとする。そこで住民たちが対話をもって、自分たちの地域を差し当たりどうするのかというような取り組みです。これがなかなか難しい。たとえばもう一つ例を出すと、ラグビーの話をしましたけども、あんなに津波にあって何もなくなり、ようやくかき上げが終わった段階です。そこに一体自分たちはどういう地域を作っていくのだということを巡っても、非常に難しいですね。行政もいろいろ説明をし、住民集会を開きますが、結局住民は行政がどうしてくれるんだ、っていう態度に出ることが多い。それから、行政サイドも、やっぱり国の方針はこうでということになって、なかなかここでいっている自治的な姿が現れてこないですね。しかもそれが日本の伝統的な地域と接合するようなものでなければならぬ。もちろん海外の事例も参考にしながらですけども、なかなか実際難しいなというふうなことを思って書いたつもりなんですね。ですので、総合型を全面否定しているとかそういうことではもちろんないですね。総合型には、やはり歴史的な使命というのがあると思ったのです。つまり、いくつかのベクトルの交差点だというふうに言いましたけども、それまでのものからいっそう地域へと目を向けたということは大変大きいことで、しかも NPO なりクラブ論なりに展開したというのも大きいことだというふうに思います。ただし、具体的に考えた場合に、その中身を盛り込んでいくのはおそらくこれからであって、その時により住民の関与とか、それをどう取り込んでいくのかっていうのが、残された大きなテーマだろうと思って見ております。

【石坂】 ありがとうございます。総合型を初期の段階から、構想のところから立ち上げられている黒須先生の理念の部分と現実とで、どのようなズレが生じているのか。これはこの後のシンポジウムに引き受けさせていただいて、引き続き議論させていただければと思います。まだまだご質問があろうかと思いますが、ここでいったん締めさせていただきます。それでは、どうもありがとうございました。(拍手)

(了)

地域スポーツのこれまで そして、これから

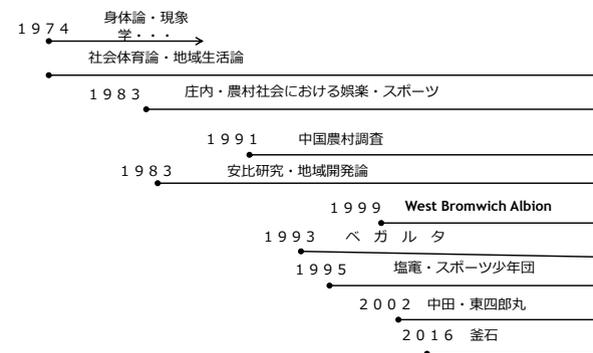
0. 「フィールド」 遍歴
1. 最近の体験
2. 日本近代化における「スポーツ的なもの」
3. 総合型の性格
4. ポスト総合型にむけて

中島信博

1. 最近の体験－釜石市鵜住居地区

- ▶ ラグビーW杯（2019）
- ▶ お盆野球
- ▶ 虎舞

「フィールド」 遍歴



虎舞（鵜住居）



お盆野球（鵜住居）



ラグビーW杯（2019釜石）



2. 日本の近代化における「スポーツ的なもの」

第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期
1870年	1920年	1970年	2020年

- I. 維新时期～第一次世界大戦
- II. 第一次世界大戦後～高度経済成長期
- III. 低成長期～東京五輪2020
- IV. ポスト東京五輪

I. 維新时期～第一次世界大戦

- 1. 校友会 . . . 課外教育
- 2. 学校体操 . . . 義務教育
- 3. 運動会 . . . 地域社会
- 4. 体育協会・国際競技・国庫補助 . . . 国際社会

II. 第一次世界大戦～高度経済成長期

1. 野球・メディア・プロ化
2. 東京五輪
3. 青年団・神宮大会・国体
4. 国民体力・ラジオ体操
5. 社会体育・レクリエーション
6. 企業スポーツ
7. 部活動・スポ少

3. 総合型の性格

Jリーグの歴史的意義

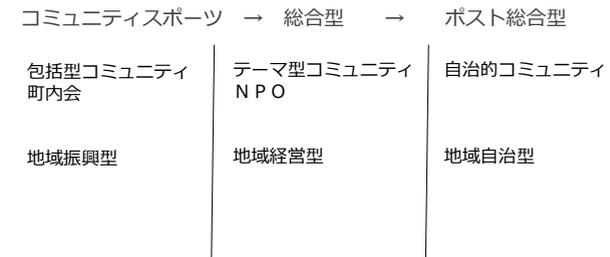
- ▶ 学校・企業から「地域へ」
 - ホームタウン
 - 地域密着
 - スポーツ文化
- ▶ 「地域から」となっているか？

III. 低成長期～東京五輪2020

1. レジャー論
2. コミュニティ・スポーツ
3. 総合型

3. 総合型の性格

歴史から（Ⅲ期）



3. 総合型の性格

出自から：算術から仁術へ

- ▶ 国際競技力低下（80年代後半）
 - スポーツ振興基金（1990）
 - Jリーグ
 - スポーツ振興くじ
 - 総合型

- ▶ クラブ論／経営論 vs 地域論／生活論

外形的（多種目、多世代）	社会的意味
ドイツ・モデル	
中学校区の固定化	
受益者負担論	

4. ポスト総合型にむけて

- ▶ 「地域」は国家を相対化する中間集団

国家政策の受け皿？
- ▶ 地域イニシアティブ
- ▶ 顧客／消費者 から 主権者／生活者へ
- ▶ 指定管理

4. ポスト総合型にむけて

小地域 で ブリコラージュ

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ▶ 寄り添う わがこと 困りごと <li style="font-size: small;">弱者
生活課題 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ つなぐ 設計主義でなく あるもので c f. 老人福祉 |
|---|--|

参考 「地域」って？

